

学内学術研究発表会【教員】

日 時

2021年11月10日(水)【開会 12時30分】

開催方法

オンライン(Zoom)※詳細は、メールまたはT-poをご確認ください

A会場

12:40

～

13:10

ウィズコロナ社会における小規模地域芸術祭の運営について

田島 悠史 (表現文化学科 講師)

2020年以来、新型コロナウイルス感染拡大により、社会の様々な基礎システムが変化せざるを得ない状況に置かれている。私は、これまで茨城県ひたちなか市において、「みなとメディアミュージアム」と呼ばれる小規模地域芸術祭の運営を行なってきたが、様々な対応を必要に応じて実施してきた。具体的には、1)オンライン対応の可能性と限界、2)基盤整備、3)イベント運営における対応、4)省庁との対応、などがあげられる。今回の報告では、その実践例について取りまとめるとともに、懸念されるべき事態とそれへの対応について言及する。

13:15

～

13:45

東京大空襲の死者が想起される場所

木村 豊 (人間科学科 講師)

戦時中、米軍の空襲によって東京では10万以上の死者を出したとされているが、戦後75年以上が経過した現在でもその被災地域では公的な慰霊施設や各種のモニュメントで空襲の死者に関わる行事が毎年行われている。報告者はこれまで、東京都内において空襲の死者が表象される場所の観察調査とともにその場所で空襲の死者を想起する人びとへのインタビュー調査を進めてきた。そこで本報告では、そうした調査をもとに、空襲の死者は現在どのような場所でのどのように表象・想起されているのかについて、社会学における集合的記憶の観点に基づきながら検討したい。

13:50

～

14:20

対人援助職のバーンアウト

小堀 彩子 (臨床心理学科 准教授)

バーンアウト(燃え尽き症候群)は、対人援助職の職業病とも言われるが、対人援助職はなぜバーンアウトに陥りやすいのだろうか。このことを(1)職業的援助(対人援助職による援助の受け手への援助)と家庭援助(家族による家族に対する援助)の比較、(2)援助の受け手との関係構築に伴う困難、という2つの観点から、発表者が行った実証研究を引用しながら説明を行う。

14:25

～

14:55

初期時衆教団の基盤形成 一時宗学の構築をめざして一

長澤 昌幸 (仏教学科 講師)

時宗学の構築、特に根本聖典を有しない時宗教学がどのように形成されたのか、その特異性を研究テーマとしている。今回は、近年、取り組んでいるテーマのひとつ、初期時衆(一遍・真教)がどのようにして教団の基盤を形成していったのか、について浄土宗西山派、遊行拠点キーワードに論じたい。

15:00

～

15:30

インド仏教最後期における学知形成と展開 一文証としての引用と知識基盤の関係性一

倉西 憲一 (仏教学科 講師)

インド仏教は13世紀初頭のムスリム侵攻によるヴィクラマシーラ僧院など仏教拠点の崩壊を皮切りに加速度的に終焉を迎えたと言われている。最近の研究では、インド仏教は後援者の減少や他宗教の台頭などといった事由により、既に10世紀ごろから緩やかに終焉へ向かっていたと考えられている。終焉を迎える直前の12世紀ごろ、仏教僧たちは起死回生を狙って様々な対応策を講じていた。最も顕著な対応策は、9世紀ごろから多種多様に展開変容していた仏教の教理や実践を一つに整理・統合することであった。こうした潮流の中で、学僧の著作内の文証とその文脈を精査し、学僧たちの知識基盤について考察する。

A会場（続き）

15 : 35

～

16 : 05

大正大学図書館所蔵『いそざき』をめぐる一考察

渡辺 麻里子（日本文学科 教授）

『いそざき(磯崎)』は、作者不詳、室町時代物語の一編である。嫉妬の心から夫の女を脅した妻は、その時に付けた鬼面が取れなくなってしまうが、日光山の稚児学生である息子が懸命に説法して母を救う話である。鬼女譚の視点などから注目されていた物語であるが、本発表では、物語内で唱導説法が果たす役割に注目して分析したい。

また『いそざき』の伝本は様々に知られているが、大正大学図書館蔵本は、学界でも知られていない伝本である。特に、(一)絵巻の絵が巻頭にまとめられている点、(二)中巻にて母が救済されるという物語の結末を迎え、下巻に説法の話の別立てにまとめているという独自の構成を持つ点などが注目される。本発表では、以上のように、『いそざき(磯崎)』という物語の内容分析と、大正大学蔵本の特徴の検証を行い、大正大学蔵『いそざき(磯崎)』の意義を検討したいと考えている。

16 : 10

～

16 : 40

公立学校の英語教育における外国語指導助手(ALT)の在り方

—英語圏と非英語圏出身の元外国語指導助手の視点から—

天木 勇樹（人文学科 准教授）

英語圏と非英語圏出身のALT経験者306名を対象とした調査では、日本人教員とALTとのチーム・ティーチングの関わり度合い、ALTとしての仕事と生活の満足度の高さ、英語授業におけるALTの在り方と活用方法の3つの点から考察した。調査結果から、ALTの役割に関する位置づけをさらに明確にする必要があることが明らかになった。日本人教員は、異文化コミュニケーションのロールモデルとして、生徒に異なるバックグラウンドを持ったALTとのやり取りを示すことができる点もチーム・ティーチングのメリットの一つである。英語の授業で協働する効果的なチーム・ティーチングを取り入れるためにALTと日本人教員が共に参加する英語指導力研修や意見交換の機会を提供することが重要であると結論付けた。今後は、現場で教鞭を取っている教員の状況を把握することが、ALTを活用した英語教育モデルを構築する上で有効であると考え、フィールド調査を実施する予定である。

16 : 45

～

17 : 15

ハーンとラマ —清朝皇帝の条件—

新藤 篤史（歴史学科 助教）

清朝皇帝の権威の本質はモンゴルのハーンとされているが、どのような経緯で満洲人がモンゴルを統治する存在になれたのだろうか。フビライとパクパ、アルタンとソナム・ギャンツォ、アバタイとソナム・ギャンツォ、そしてホンタイジ、順治帝、康熙帝の事例を提示しながら、ハーンおよび清朝皇帝の条件のひとつともいえる、チベット仏教との関係構築について考察する。

17 : 20

～

17 : 50

戦後初期における読書指導に関する研究

—「学習指導要領(試案)」と『学校図書館の手引』の比較を中心に—

稲井 達也（教育人間学科 教授）

第2次世界大戦後の我が国の教育改革を強力に推進したのは連合国総司令部 (GHQ/SCAP) 幕僚部に設置された民間情報教育局(CIE: Civil Information and Educational Section)である。CIEは当時の文部省を指導し、1947(昭和22)年と1951(昭和26)年には2つの学習指導要領(試案)を作成した。国語科では読書指導についての指導内容が示された。また、1948(昭和23)年にはCIEの指導の下、文部省から『学校図書館の手引』が発刊され、読書指導の指導内容が示された。両者とも多くの教育関係者が作成に協力した。教科である国語科の読書指導と学校図書館における読書指導では視点が異なる。戦後、時間を経ながら、国語科の読解指導と学校図書館を中心に行われる読書指導という2つの領域が意識され、分化・確立していくことになる。両者の比較を通して、我が国の戦後教育における読書指導の特徴や特異性などについて明らかにする。

B会場

12:40

～

13:10

2018年毎月勤労統計改革の失敗

高原 正之（公共政策学科 教授）

2018年に毎月勤労統計の改革が行われた。内容は、①ローテーションサンプリングの導入とギャップ修正の廃止、②常用労働者の定義の世帯・個人統計との統一、③①②の同時実施であった。その結果は、①により、賃金指数に上方バイアスが発生し、②では統一が達成されず、かつ、過去の統計との接続ができなくなり、③により、無作為抽出ができないという事態が発生した。この改革は失敗に終わった。

13:15

～

13:45

再生可能エネルギーの社会受容性とプロシューマー

—太陽光発電システムを事例として—

田島 恵美（公共政策学科 准教授）

この発表では、前半で再生可能エネルギーの社会的受容性概念を整理する。社会的受容性の主体に関するこれまでの研究に加え、分散型エネルギーでもある太陽光発電では、その受容主体は、電力のプロシューマーである場合もある。このような状況にかかわる先行研究の整理を示す。後半では、そうした枠組みに基づき進行中の調査に関する経過報告を行う。

13:50

～

14:20

地域通貨ゲームによる地域通貨学習効果の検証

宇都宮 仁（地域創生学科 准教授）

地域通貨ゲームとは特定の地域社会における様々な主体を担うプレイヤーが法定通貨と地域通貨を活用して財やサービス、ボランティアなどを取引していくものである。本研究では、地域通貨ゲームをおこなうことでゲーム参加者の地域通貨の学習効果が上がるかを考察した。

14:25

～

14:55

経済理論の大衆化から政策形成へ

—テキストの質的・量的分析による実証研究—

仲北浦 淳基（地域創生学科 講師）

発表者は経済思想史・経済学説史を専門とする。経済学者の理論の独自性は彼／彼女の言説（著作、論文、講演など）に表れる。こうして公表された言説は、いかにして国民へと波及し、民意を形成し、議会をへて政策に具現化されていくのか。

今回の発表では、テキストデータの量的分析手法（テキストマイニング）と経済思想研究における旧来からの質的分析手法とを統合するために提案した方法を説明する。質的データである“コトバ”を量的に解析する手法は、インタビューやアンケートの自由回答欄の新たな分析手法の1つとして、大学教育にも活用できるのではないだろうか。

15:00

～

15:30

水俣をめぐる思い・行為の後景

—石牟礼道子と天の思想—

丹波 博紀（DAC 講師）

『苦海浄土』を描いた作家・石牟礼道子の句に「祈るべき 天とおもえど 天の病む」がある。天は地とともにコスモス（宇宙、“天人地”）をなすが、その天が病むとはどういうことか。それも人の文化（作為）によって病む。ただし、それは人が病むということでもあり、そのことに、この病む天は呻吟しもする。

こうした石牟礼の「天」は現代の、ことに水俣病をめぐる1つのコスモスの発露だともいえる。この点を思想史の観点からたどりながら、そのもとでの人間の生き方（倫理）への思いなしを考えたい。

B会場（続き）

15:35

～

16:05

I 類社会の探究におけるコロナ禍での「地域×学」

中塚 光之介（DAC 講師）

I 類社会の探究において進めている「地域×学」（フィールドワークを含む学び）を、コロナ禍のなかでどのように学ぶことができるのか、その工夫と挑戦について。

発表内容は以下。

- ・社会の探究で行っている「地域×学」の紹介
- ・コロナ禍で、地域で学ぶこと
- ・今年度の「地域×学」の成果（第2QTまで）
- ・次年度に向けて

16:10

～

16:40

文系学生への初年次教育としての「データサイエンス教育」のアプローチと成果 ①全学必修科目「データサイエンスⅠ～Ⅵ」における成果と課題

前田 長子（地域創生学科 教授）

尾白先生と同一テーマで切り口を変えて行います。前半の発表は大きな枠組みの話となります。初年次教育におけるデータサイエンス教育実施の目的と位置づけを明確にした後、本学でのデータサイエンス科目設計の考え方を文系他大学と比較しながら説明する予定です。更には現2年生の状況を踏まえ、約2年間の学修の成果を定量面、定性面から分析を行い、成果と課題について報告する予定です。

16:45

～

17:15

文系学生への初年次教育としての「データサイエンス教育」のアプローチと成果 ②数理・情報系が苦手な学生へのアプローチ方法、またその成果と課題

尾白 克子（DAC 講師）

前田先生と同一テーマで切り口を変えて行います。後半の発表は①の発表を受けて、「数学苦手な学生」への取り組みにフォーカスした内容となります。本学に入学する学生の特徴を踏まえた1年生の科目設計の考え方とあわせて、苦手学生への対応手法（クラス編成、教材の工夫、学修支援、面談など）を様々な切り口から説明します。更にこれまでの取り組みを定量面、定性面から分析を行い、2年弱の成果とまた明らかになった課題について報告いたします。

■ 連携企画のご案内 ■

附属図書館において、「学内学術研究発表会連携展示」を開催します。
今回発表される先生方の著書、共著、並びに研究活動関連書籍を展示します。
お気軽にお立ち寄りください。

- 期間：2021年11月9日（火）～ 11月26日（金）
- 場所：8号館2階 カウンター横 企画展示棚